10 戦争に翻弄された少女時代と忘れない戦火の炎

小川　典子（りぷりんと・中央区　78歳）

『えんぴつびな』いかがでしたか。これから、おばあさんの子ども時代のお話をします。

日本が戦争に負けた時、私は小学校（当時は国民学校）の二年生でした。それは1945年（昭和20年）8月15日、夏の暑い日のことでした。重大発表があると聞かされ、疎開先の家の居間に大人と子どもが集まって坐りました。天皇陛下のお話ということでしたが、ラジオは「ガガー、ピピー」という音がすごく、何を言っているのかよくわかりませんでした。ただ、まわりの雰囲気で、戦争に負けた、終わったんだということはわかりました。

もともと私は、横浜市の反町というところで生まれ、青木国民学校に入学しました。一年生の時は、空襲警報が鳴るとみんな急いで家に帰るという状態でした。学校の講堂は軍に接収され、兵隊が寝泊まりをしていました。その人たちが飯ごうでご飯を炊き、きゅうりや大根を切っている姿をよく見かけたものです。

ミッドウェー海戦に敗れ、次々と占領地を失った日本は、次第にアメリカ空軍による激しい空襲にさらされるようになりました。そこで、都会から田舎に移住する疎開が実施されることとなりました。

疎開には、田舎の親類を頼る「縁故疎開」と、子ども達が学校ぐるみで地方に移住する「集団疎開」とがありました。「集団疎開」は地方のお寺とか旅館で、先生も一緒にみんなで生活をするのです。当時は国全体が食糧不足でしたが、疎開している子はみんなお腹を空かしていました。あまりにお腹が空いた子は、持っていった絵具をなめたという話も聞きました。

私は、昭和20年4月、自身が二年生、兄が五年生の時に、一カ月ごとに母と一番上の姉が交代で付き添うかたちで、横浜の郊外にあった知り合いの家に疎開することになりました。転校した学校では、村の子ども達に靴を隠されたり、「疎開っ子、疎開っ子」といじめられたりしたことを今でも覚えています。

そして、5月末、横浜が大空襲で焼けました。疎開先の田んぼの近くを鶴見川が流れ、その堤防の向こうに上がっていた真っ赤な大きな炎は、今でも目に焼きついています。幸いに横浜にいた家族は全員無事でしたが、あっちこっち逃げ回って大変だったという話を聞きました。近所の方が火傷をしたり、途中まで一緒に逃げていた隣家の方が亡くなったりしたそうです。疎開先の田んぼにも爆弾が落ちてできた、直径3メートルくらいの大きな穴があちこちにありました。

戦争は終わっても、（自分で畑や田を持っている人は別にして）日本中、食糧不足でしたので、いつもお腹をすかしていました。そこで、裏山に行って栗、アケビ、くわの実、むかご、野いちご等をとりに行って食べました。

その後、私が四年生の時に、東京に住むことになりました。当時、他県から東京へ移るには制限があり、なかなか許可が下りなかったため、結局学校に行けたのは一学期も終わりに近づいた7月10日のことでした。その日にいきなり国語のテストがあり、結果は20点でした。忘れもしません、『ポプラの木』という国語の教科書からの出題でした。私は教科書すら見たことがなかったので、できる訳がありません。とても悔しかったので、それからはものすごく勉強しました。その後、学校では東京に戻ってきた子、転校していく子と、さまざまに出入りがありました。また、小・中学校のクラスの中には、爆弾で腕を失った人や顔に火傷をした人もいました。

当時を思うと、今の日本は平和ですよね。平和の尊さを今一度考える必要があるのはないかと思います。二度と戦争は嫌ですね、この平和をいつまでも！

『えんぴつびな』

長崎源之助/作　長谷川知子/絵　金の星社

空襲で家を焼かれ、家族と田舎へ引っ越してきた私は、転校先で、わんぱくなシンペイちゃんと同じクラスになります。ある日、元気づけようと、短くなった鉛筆で、おひな様をつくってきてくれます。「明日、三人官女もつくってきてやろう」と約束したその夜、シンペイちゃんは空襲で死んでしまいました。（文・小川典子）

● 発　　行：1984 年 2 月
● ＩＳＢＮ：978-4-323-00284-2

現在は精力的に読み聞かせ活動を行っている
（筆者近影）